

6月初めのお昼時。大分県由布市のメインストリート・湯の坪街道にほど近い喫茶店に、由布院盆地のお年寄りや、市外から来た若者が集まった。にぎやかな会話を、はじける笑顔。昼食会は、この日の空のよ

生活の一部に

「年寄りは行くところが少ないからねえ」「食事会の日は、そわそわして始まるのが待ち切れん」

「原っぱ」が毎週交互に開く食事会とお茶会。待ちわびる気持ちを、集まったおばあちゃんたちの何人もが口にした。常連の十数人がみな一人暮らしというわけではない。同居しているも家族は仕事に忙しい、1人で出歩くのは心細い...など、それぞれの理由から「原っぱ」にやってくる。コンサート鑑賞やミニ旅行なども企画され「ほげないためにもありがたい」存在だとい

2005年秋、近所のお年寄りの食事会から始まった「原っぱ」は、06年7月にNPO法人化。「みなさん最初はあまりしゃべらなくて、楽しいのかどうか分からなかったけど、ずーっと来てくれた」と代表の浦田龍次さん(47)。そのうち「知人が貸したお金を返してくれない」などと打ち明ける人が出てきて、弁護士を紹介して取り戻したこともある。参加者の1人、真方松枝さんの(82)は、夫の定年退職で首都圏から移住して22年目。越してきた当初は、夫

高齢者 幸せ実感 カフェ交流

大分のNPO「風の原っぱ」が拠点づくり



(上から)コミュニティーカフェで食事しながら語り合うお年寄りと学生たち
▶「原っぱ」の事務所で、地元の高校生に学習サポートをする浦田龍次さん
▶由布岳のふもとに広がる田んぼで、アイガモ農法の準備を手伝う学生たち

うに明るく晴れやかだった。食と農を通じて、高齢者と若者、地域内外の交流を促す、同市のNPO法人「ムラづくりNPO 風の原っぱ」。その交流拠点となる「コミュニティーカフェ」を訪ねた。(木下悟)

きるからねえ」

国境も超えて

参加者「原っぱ」は、支援する人、される人という関係ではない。

お年寄りには、お茶、団子汁、ユズコンヨウツクリなど、身に付けた生活の知恵がある。農作業ができる人もいる。カフェの食材を

食・農を通し若者や子どもと「つながりがうれしい」

ついたり、ボランティアしたりとメンバーは行動的だ。野草に詳しい1人の指導で、野菜と砂糖から酵素ジュースをつくるなど、新たな挑戦もしている。共に活動する仲間といった感覚で、週に1回、参加者がカフェを切り盛りする「おばあちゃんカフェ」も構想中だ。

「原っぱ」側も、高齢者にとどまらず若者や市外、海外の人まで含めた交流を目指している。

水田に放したアイガモに、除草や害虫駆除を担わせることで有機米をつくる「アイガモ農法」は、交流を広げる手段の一つ。アイガモの管理を農家と契約



「原っぱ」は、交流の輪に加わることもある。福教大に生涯教育の一環として共生社会教育課程を

「原っぱ」代表の浦田さんは、1993年から約1年、由布市に合併する前の

地域の中から

「原っぱ」は、1993年から約1年、由布市に合併する前の

つくりたい、ボランティアしたりとメンバーは行動的だ。野草に詳しい1人の指導で、野菜と砂糖から酵素ジュースをつくるなど、新たな挑戦もしている。共に活動する仲間といった感覚で、週に1回、参加者がカフェを切り盛りする「おばあちゃんカフェ」も構想中だ。

「原っぱ」側も、高齢者にとどまらず若者や市外、海外の人まで含めた交流を目指している。

水田に放したアイガモに、除草や害虫駆除を担わせることで有機米をつくる「アイガモ農法」は、交流を広げる手段の一つ。アイガモの管理を農家と契約

旧湯布院町で町議を務めた。大分県・日出(ひで)の米車演習に異を唱え、「合併で町が大きくなれば、地域と住民の意思が乖離する」と市町村合併に反対した住民運動の担い手として、地方自治への住民の意思の反映を願って議員になった。だが、やってみて違和感を覚えた。

議員になると仕事場は役場の中が中心となり、選挙で応援してくれた人々と会う機会が減った。住民の生活の場と離れ、人々の思いを実現するのは難しいと感じた。

そして思った。「地域の中で、お互いの暮らしがつながっている関係があつて初めて問題に対処できるのではないか」

つながりを回復するのは何かと悩み、「人の一番基本の食、物」に思い当たる。議員活動を続けるよりは「原っぱ」を始めることを選んだ。

浦田さんは今、「やり方は人それぞれだろうけど、僕には、こっちの方が向いている」と感じている。コミュニティーカフェを拠点に地域の人の暮らしを支え、つなぐ。夢は、そんな役割を担うことだ。

豊かで活力ある長寿社会実現のための人材育成や、地域ネットワークづくりなどを支援する公益社団法人「長寿社会文化協会(WACC)」(東京)によると、無理なく気楽に支え

コミュニティーカフェ

合う人々が集まり、情報交換をし、居心地のいい人間関係を構築したり、相互のカウンセリング機能を持つたりする場所として位置づけられる。活動分野は幅広く、まちづくりから、国際交流、農業、子ども、青年、高齢者福祉、障害者福祉などがある。WACCは、そうした全国の具体的な活動をホームページで紹介している。

「原っぱ」が運営する「原っぱカフェ」は5月8日にオープン。800円の弁当を、登録者には500円で提供するなど高齢者や障害者が気軽に訪ねられる場にしている。一方、地元の人材活用も兼ね、カフェを任せる「いちいちコックさん」も募集している。営業は午前10時～午後4時。定休日は、火・水曜日。原っぱカフェ0977(84)2621。

共に生きる

ご意見をお寄せください
福祉に関するご質問も募集します。
氏名、連絡先を明記してください。

〒810-8721 (住所不要)、西日本新聞
報道センター福祉取材班
ファクス=092(711)6246
メール=fks@nishinippon-np.jp

